「感覚」か？　「知覚」か？　の見極めは難しい

人にとっては、例えば、「見えること」と「見ること」、「聞こえること」と「聞くこと」、「触れられること」と「触れること」は違う。

各感覚器官では、「見えること」等は受動的なことであり、「見ること」等は能動的なことであり、能動的ということの背景にはその人の気持ち（心の動き）がある。

また、「感覚」とは「外部からに刺激に対する一時的応答（反応）」であり、「知覚」とは「『感覚』から得た情報の中枢神経系による解釈」であると言われているが、人では「『感覚』と『知覚』が同時に起きる場合が多い」だけに、外界の変化を単に受動的に感じているだけなのか、外界の変化を能動的に感じようとしているのか、こちらでその見極めはなかなか難しい。

重症児に長年係わってきたが、まだこの見極めの観点が乏しい自分に否応なく気づかされている。

つい先日、書籍広告でタイトル「皮膚感覚と人間のこころ」が目に止まり、長年の自らの課題解決へのヒントがあるかなと早速購読した。

著者は、皮膚を専門とする分子工学者のよう。

「外界と直接触れ合う皮膚は、環境変化から生体を守るだけでなく、自己と他者を区別する重要な役割をになって、脳からの指令を受ける一方で、その状態を自らモニターしながら独自の情報処理を行い、触覚・温度感覚のみならず、光や音にも反応している可能性」等々を、国内外の皮膚感覚に関する最新の学術論文を紹介・引用しながら、「皮膚を通して、生命とこころの本質に迫る」と謳う書であった。

読み進む内に、一般書というより学術論文引用紹介・引用が多くて専門家向きの書かなと思えただけに、残念ながら正直読みこなすことが出来ず、課題解決に「少し、すっきりした」という読後感を持つに至らなかった。

つまり、本書の文章を目では追うという「視覚から得た情報の中枢神経系による解釈」が出来る程の知識量、力量が自分にはまだまだ乏しいということか……(;_;)

阿部幸泰　　（2013 年 6 月 28 日　記）